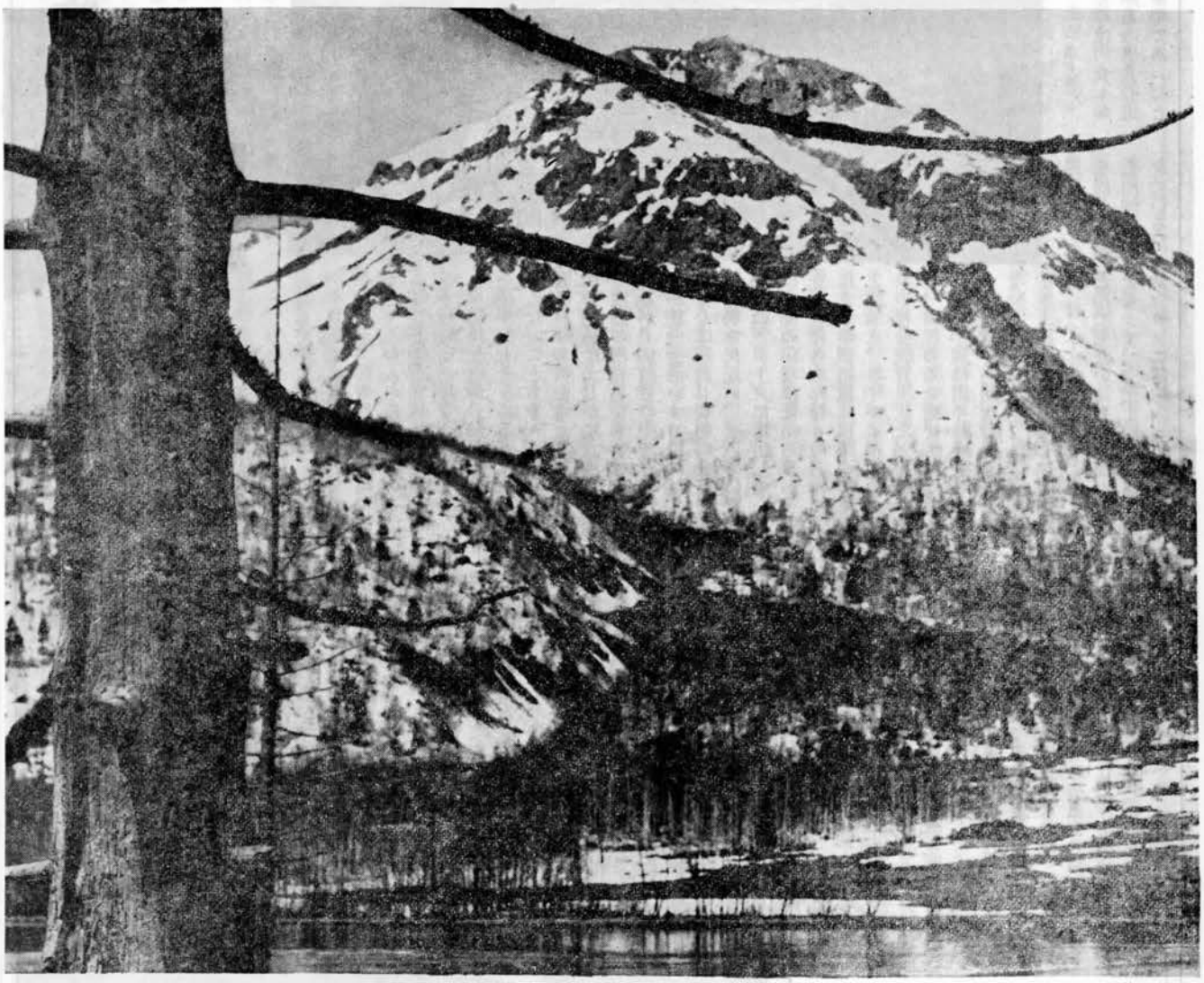
① 毎月1回 25日発行　　第3種郵便物認可(昭和35年7月26日)

山と博物館

第13巻　第3号　1968年3月25日　大町山岳博物館



自然とロープウエイ

北アルプスの西穂高にロープウェイを作る計画があり、現在賛否両論がでている。

現代の物質消費文化の急速な発展が知らず知らずのうちに都市部の自然を破壊し、人々は自然を求めて野に山に足をのばす、そして高山の頂にまでロープウェイを作ることになる。このところ自然に親しむ風潮は年々高まってきており結構なことと思う。また足の弱い人、ご老人のためにロープウェイを作り便宜を計ることは大いになされても良いことと思うが、第一に考えてもらわねばならぬことに建設地域の自然環境の問題である。

白馬岳は国の特別保護地域に指定されており、貴重な動植物を守るためにパトロール員が常駐して監視にあたっているにもかかわらず毎年数十件の違反報告がされている。

多くの人が訪れるのに比例して荒されていく、日本人の自然に対する認識は一般的に余り高くないのが残念ながら現実である。

西穂高の場合、麓には特別保護地域の上高地が控えている。

ロープウェイができた場合、人は今の何倍も訪れることだろう。そして特別保護地域を含む北アの自然環境は心ない人々に荒されないと誰が断言できよう。

永い間積み重ね作られた自然のバランスを一つでも狂わせてしまうと、次々と破壊の連鎖反応が起ることを考えてほしい。

私共は、特別保護地域を含んだ、この自然を、より自然のままに残しておきたいと思うし、残すのが子孫に対する義務でもあると思う。

ロープウェイを架ける、その経済的利益計算以前に、自然とはどんなに微妙なものかを、そして人間にとっていかに必要かを考えてみるべきではないだろうか。

（千葉彬司）

小さな博物館の誕生へ

あゆんだ道

興水太仲

地鎮祭

〝博物館をつくりたい〟

こんな夢を持つようになったのは、たしか昭和二十九年の暮れ、勤務先からの帰省の道の小海線野辺山駅のあたりの車中であったと記憶している。

それまでにも考えないではなかったが、長野県は教育県であると多くの人から聞いている。このことはありがたいことである。しかし一面ではそうであるかも知れないが、全部が全地域が必ずしもそうあるとは決して云えないことも多々ある。教育面における例を考えると、義務教育関係はたしかに立派な組織と実動の内容とをもって育っているが、切角その中で育った人々が社会生活をする段になると、多くは野放し状態になり、学習の場を失ない、せいぜい野球などのスポーツに精出している位が関の山ではなかろうかと思う。近年各地に様々のグループによる学習組織は出来つつあるとは云え、さすがイギリスあたりの社会教育現状など比較したら、雲泥の差を感ぜずにはいられない。別に広く社会人のレクリエーション的な行動も盛んになってはいるが、多くの場合、マイカーかなどに混乗し、観光地巡りをし「○○へ行って来た」と云うことごとを繰り返し、とんでもない遠方の見聞を広め表面的な遊びをもって、文化生活の高峰に生きているかのサッカクに落ち入っていると思う。観光地巡りも悪いことではないが、現今の様な雑とうに命を賭けて迄出掛ける必要もあるまいと思っている。

近年科学は目ざましい進歩発展をしているテレビにラジオに、新聞に、数限りない雑誌や著書に、人間の小さな頭の中にはとうてい入り切れない新事象が次々に公開発表されている。小学校の子供達ですら、数年前と比較したら及びもつかない新語、名称を日常茶飯に用いているが、果してそれは、身についたものであるかどうか考える時、極めてあやしいことで、これは知的教養の不消化物であると思っている。

古来人間は、自然をみつめ、自然に語らいその中にあって、文学を生み、哲学を考え、科学を育てて来、芸術を創って来たと思う。そしてその結果として真なるものを考え、美なるものを創り、聖なるものを感じて生き、その基盤に立って、日々の生活に対して生きて来ていると思う。

こんなふうに考えると、どうしても、物を見、考えることが大切に思えてならない、そこで、世の中に一つでも多くの公共社会教育センターを、と願わずにはいられない感慨にせまられ、より多くの人々に郷土を、足もとを、じっくりと見、考え、そして順次広く見考えていってもらいたい願望から、信州佐久の地域を見た時、おしむらくは、願う何物も現存しない実状にある。

そこで、八ヶ岳を母体とし、ここに生きる人々と自然を主題にし、一大教育センター建設の夢を引っさげて、運動に乗り出したのが昭和三十一年であったか。

先づは我が想いに賛同してくれる人あつめから始まったが、理想・構想の理解は多くの人々から得ることが出来たものの、裏付けになる経済的な問題に立ち至ると、一言半句も出なくなる。事更にモウカル事業でないことは明白な事実、ー金が欲しいーとしみじみ思うことが幾度か。そこで、一計を案じ、地域に埋蔵する文化遺産を借用、これを結集して展示会を村役場で公開、いわゆる〝物を通しての教育〟をした。こうして得た収穫は、昭和三十六年に至って、村議会に「郷土博物館建設に関する件」として上提された。しかしここにも、一小村が巨費を投じて…と云う考えと、人造りも理解できるが、食って後にコットウ品を眺めるべきだと云う、反論にあって議決せずじまいに終った。しかし、ここまで来たことは少なからぬ進展と考え、更に願いを具申し続けた結果、少なからぬ厚意と協力によって翌年から予算めいたものが出費されるようになった。少額ではあったが、八年にわたる願いの実現に及んだわけである。

以来、順次具体的な計画に取り組める様になって、位置、規模、などに関することまで話題になるようになって来た。

しかし、ここで事態急変、村政の悪化にともない、むざんにも一切この計画は取り止めの事態に立ち至り、再興の見通しは全く断たれてしまった。

政治と経済と、教育と文化と、人の食うことと…など〳〵又しても考えさせられた。

しかして数年、初志を連ねて只、又の機会を待って、何時何処で突発的に博物館建設の事態が発生しても応ぜられるための用意は順次整えて来たが、あてもない客を待つに等しい歳月が流れた。しかしこの間に、期を同じく、小諸市においても〝博物館建設〟の動きが、はじまっていることを知り、各方面からの進めもあって、昭和四十一年頃から、再び位置をかえて、初期の願望再開の動きがはじまった。

小諸市は、古来天下に知られた小諸城跡と藤村の懐古園があり、古くからの交通の要点でもある。又、浅間山と云う名だたる活火山を有し、社会教育施設も近年増設しつつありすでに、動物園、児童遊園地、植物園、藤村記念館等々の運営も順次活気に満ちて来つつあることなどの利点と実情から、ここならや

れると目算し、今迄の失敗経験をフルに活用し、その実現に呼応するための意を決し、参加協力にふみ切ったのである。幸なことに、ここでは、市長自らが極めてこの面の関心が強く、このことは実現への強大な原動力となって動きはじめた。

第一期昭利四十年度

教育委員会を中心とする関係者の学習から大町山岳博物館、富士ラマパーク、白根、長野原等々の見学をはじめ、開館運営に関する経過と現状、問題点等の体験の資料を集めた。こうしてここに、小諸市にはどんな博物館の建設をするかの課題を持った。

問題の焦点は営業博物館か、教育博物館になったわけだが、市政担当グループは、多く営業によって利益をあげるところに重点を置く考え方を持ち、真の意味で博物館建設を支持するグループは、その後者の考えを押し出し論議が沸騰する。この両論は、地方小都市における、博物館の持つ共通の問題であり運営にあたって今後も長く続く問題でもある と思うが、本来博物館の持つ使命からも、更には多くの、深い、支持者や理解者によって永続させようとするならば、営業的博物館運営とその内容は明らかに、本来的でないこと に同意を得、結論的には、教育を一議とする内容とその運営にその意見集約をした。

次に位置決定問題であるが、ここにも難題が山積した。結論的にはこうした施設は一小都市内どこでもよいように思えもするが、具体的には、これによって周囲の受ける様々な長短の影響があるからで、その多くは商業的発展の影響が大きいため、市の中央におくべきかあるいは郊外に置くべきかにかかるわけであるが、前の運営問題と関連し、ある面で利益を得、それによって充実と使命の達成を考えねばならず、それには将来を見通すことは大切と思えど当面多くの入場者を容易に得られる場所が、第一条件にならざるを得ず、此の点から、理想や、遠大な計画は当面曲げざるを得ず、最終的には都市中心地に決め、更には、同類施設の現存する懐古園の一角に決定した。

次に予算の関係事項であるが、これは規模にも関連し大きな問題であった。単に理想だけの規模を考えた場合、最低延坪一六〇〇㎡の建坪が欲しい計画、それに屋外の広場も相当に欲しい計算になった。しかし無制限にそれへ資金投入が出来るわけではない。結論的には場所と、予算額との見合わせの上に計画の半分を実現するに止め、後日の発展実績によって移転と増築を考えることとしたが、これでも市財政には多大な負担であった。

こうした論議の中にあって、中央、あるいは一大企業体を背景とした博物館建設の現状と比べ、しみじみと金の欲しさをかみしめた

第二期昭和四十二年度

概略の骨子が計画され、続いて細部計画が行なわれるに至り、先づ博物館建設推進委員会を発足、この会によって、再三再四、その計画に関する論議を交わした。その主な内容は、

○敷地面積の決定
○規模に関することの協議
○実地検対ー具体的な位置決定
○建設の細部計画設計の決定
○工事着工の細部決定
○展示内容の主題決定

等々であったが、細部決定は概略決定に比べ更に難問を山積したが、結論的にここに問題となったことは、会に参画する委員の個々が、それ〴〵が、そのイメージ実現のために論じ合うわけで、その意見集約に意外な時間を要した。更にそのイメージの根底に、今日の博物館は。今後の博物館は、どうあらねばならないか、について根本的に理解しあるいは学習されていないことが潜在し、それが様々の意見を発するためであると考えさせられた。しかし、このようなことによって、少くともここに参画した人々は、新らしい博物館と云うものの、いろんな面での内容をこの会を通し理解し、学習したであろうと思う時、ここにも博物館建設を通し社会人のそれの教育の大なるものを感じた。例えば、研究室をどうとるかについて、一方では「何を研究するのか既にある実存物、あるいは購入物を展示すればよいことであり、改めて研究の要はないそれだけの面積は、むしろ展示に充てた方が有効である」としたり、あるいは「展示物が見えればよい。だから多くの照明は不要である」としたりする意見である。

第三期昭和四十三年度〜四十三年度

かくして、文部省の建設に対する認可も補助金も、市財政のやり繰りも、建設業者への請け渡しもついて、建築工事の着工がはじまった。只今そのコンクリート打ち込みの作業は完了し長い論議の結晶であった建物の外殻が空にそびえ立った。やがて内部工事と、装飾工事も近くはじまり、さゝやかながら、近代建築と云われるモダンな建物が、古い歴史のふるさと小諸城跡の一角に調和して立ち並ぶであろう。

〃我が郷土に博物館がほしい〃と考えてから幾年、想えば長い年月であった。幾変転をしても来た。もうこれで、たおれることはおそらくあるまい。

東に荒々しい男性的な熔岩の岩はだをあらわにむき出し、内に熱いものをひめ、静かにそして絶えることのない白煙をたなびかせる活火山、浅間山をひかえ、南に今は昔、かっては白煙を同じくなびかせたであろう八ケ領の連山を望み、眼下に千曲川と佐久の平野をほしいままに見、北にアルプスの遠望を望む好適な立地条件の中で、小さいけれど、ちょっぴりモダンな、若い博物館が誕生、浅間山を主題とし、その山の真の姿を観、そしてそれを遠く近く眺めた佐久の人々の生活をふり返り、そして未来に進展する人々の寄って集う学習の場とし、人生を想う道場とし、未来永遠に連なる人々によって支持し運営ー発展拡充し…ーそんな意気込みを込めている。同時に県下の、日本の先輩博物館、あるいは又、教育関係組織からの、一般からの、今後、当長野県小諸市立火山博物館に寄せる期待と御支援を願って止まない。

我々当面関係者は更に今後に続く第四期、五期…に来る難事に進んで直面し、その展開に努力しようとしている。

（小諸市立火山博物館学芸員）

外装工事中の博物館

上高地冬の動物とその足あと（三）

坂田　尚

テン

上高地に棲むテンは俗に「キテン」といわれ茶黄色の実に美しい毛並みの持ち主である。前後の足首は茶褐色で短かい。

食肉目、いたち科に属し、頭胴四五〇ミリ尾二〇〇ミリ、歯数は三十八個である。

普通は木の洞穴に住み木登りがうまいし河川の支流に倒れた丸木や枝の上などをたくみに渡ることもある。

キツネより警戒心が少なく人家近くにも出現し、冬の登山者の足跡を追ってくるほどのひょうきん者でもある。

夜行性であり夜は食を求めて丹念に歩き廻り外敵のキツネ、タヌキなどに出合うと、ネコが怒ったときのような唸り声を上げて立ち向うほど気は強い。

テンは普通肉食であるが上高地のテンを飼育してみたところ、カンパン類、次にソーセージ類など魚肉品を好んで食べ野生本来のウサギ肉や野ネズミ、イワナなどはそれほど好まなかった、そして水はネコと同じ飲み方をした。

テンの足あと

行動中はほとんど毎夜同じコースを歩き廻り普通二点の足あとを雪の上に残すが、歩行中に何かを警戒して立ちどまったときなどは三点と四点の足あとになる。

テンはキツネにくらべはるかにその数も多く梓川の左岸右岸の灌木樹林一帯から出没し人家近くの残飯をあさりによく来た。

七月頃に交尾し翌年三月から四月に及ぶ長期の懐妊のあと一匹か二匹の子を産む。

タヌキ

上高地ではタヌキはその数がきわめて少ない、食肉目いぬ科に属し頭胴五五〇ミリ歯数は四十個～四十二個である。

その生棲地は梓川両岸の灌木帯の奥深い場所で、冬は巨木の洞穴に巣作りする。

夜行性であり日中は他の動物の土穴に仮眠するが夕方になると食を求めて登山道などに出てくる。

雑食もするので夏季は登山者の残した残飯類をあさりに山小屋近くまで出没する。

夜、強い照明にあったり棒切れなどで脅かされると、そのショクで仮死状態になることがある、俗にタヌキ寝入りなどと云われてあいきょうのある動物であるし、飼育すると人にもよく馴れる。

キツネやテンに比べてその動作が緩慢なため、自己の餌取りはまことにへただがそのかわりこまめに歩き廻るのが身上である。

雪の上の足あとは三点を規則正しく残し四ツ足の一点が三点の一つに重なるのが普通である、また帰路は別の道を通りねぐらへ帰る。

ウサギなどのように敏しょうな動物より割合餌取りしやすいイワナなどを取りにくる、梓川の流れは毎年二月から三月にかけてほとんど水枯れになるが、その時期になると吹雪の夜でもせっせと減水のようすを確めにくるのは、あいきょうよりむしろ涙ぐましい努力と云うほかはない。

またキツネの残したウサギの肉などのお余りを要領よく頂いているし、餌にありついた場所へは毎晩のように足を運ぶあたり山に棲む他の動物たちより正直者である。

国立公園である上高地一帯は動植物の特別の保護区に指定されているため、タヌキのような鈍重なものにもその生活環境は、貧しいながらも最も安心の出来る生棲地であると云えよう。

明科フィッシングランド　鳥獣飼育係

タヌキの足あと

寄贈ありがとうございました

自在カギ　2　白馬村　長沢　要
火ダナ　1　〃　〃　〃
ふみ鋤　1　〃　〃　〃
湯トウ　1　大町市平　成沢吉子
ねこ　1　〃　〃　〃
自在カギ　1　〃　平　傘木繁博
火ダナ　2　〃　〃　〃
ツキウケ　1　〃　〃　〃
ベンチ　1　〃　大町五十嵐又男
腕用ポンプ　1　〃　大町市消防本部
わかんじき　1　〃　大町　平林高吉
出用チョッキ　1　〃　〃
山の気象入門　1　東京都　銀谷国征
絵ハガキ　1　〃　大町　宮田清
リュック(大10)1　5冊　東筑会田村横内斉
外書籍
「山の時刻」　1　豊科町　田渕行男
代かき車　1　大町　上条為人
額ブチ・書籍　1　横浜市　松林安男
書籍　1　〃　東京都　史料館
〃　1　〃　大阪市　昭和出版KK
〃　1　東京都　袋一平
（敬称略）

お願い　「山と博物館」の購読者をつのっております。年間三〇〇円（送料共）大町山岳博物館宛お送り下さい。（切手は不可）

表紙説明

早春の焼岳

撮影　松原　繁

山と博物館　第13巻第3号
一九六八年　三月二十五日発行
発行所　長野県大町市TEL大町②〇二一
大町山岳博物館
印刷所　大町市下仲町
大糸タイムス印刷部
定価　年額　三〇〇円（送料共）